



**Horikawa  
Seminar**

Dept. of Sociology  
Hosei University

# 堀川ゼミ 募集要項

# 2010

Seminar Prospectus



“Say it with data (裏付けをもって語ろう) ——堀川ゼミの精神はこの一言に見事に表現されています。それは「現場を歩き、足で考える」ということです。”

# 私達の目指すもの

## 堀川ゼミへの招待

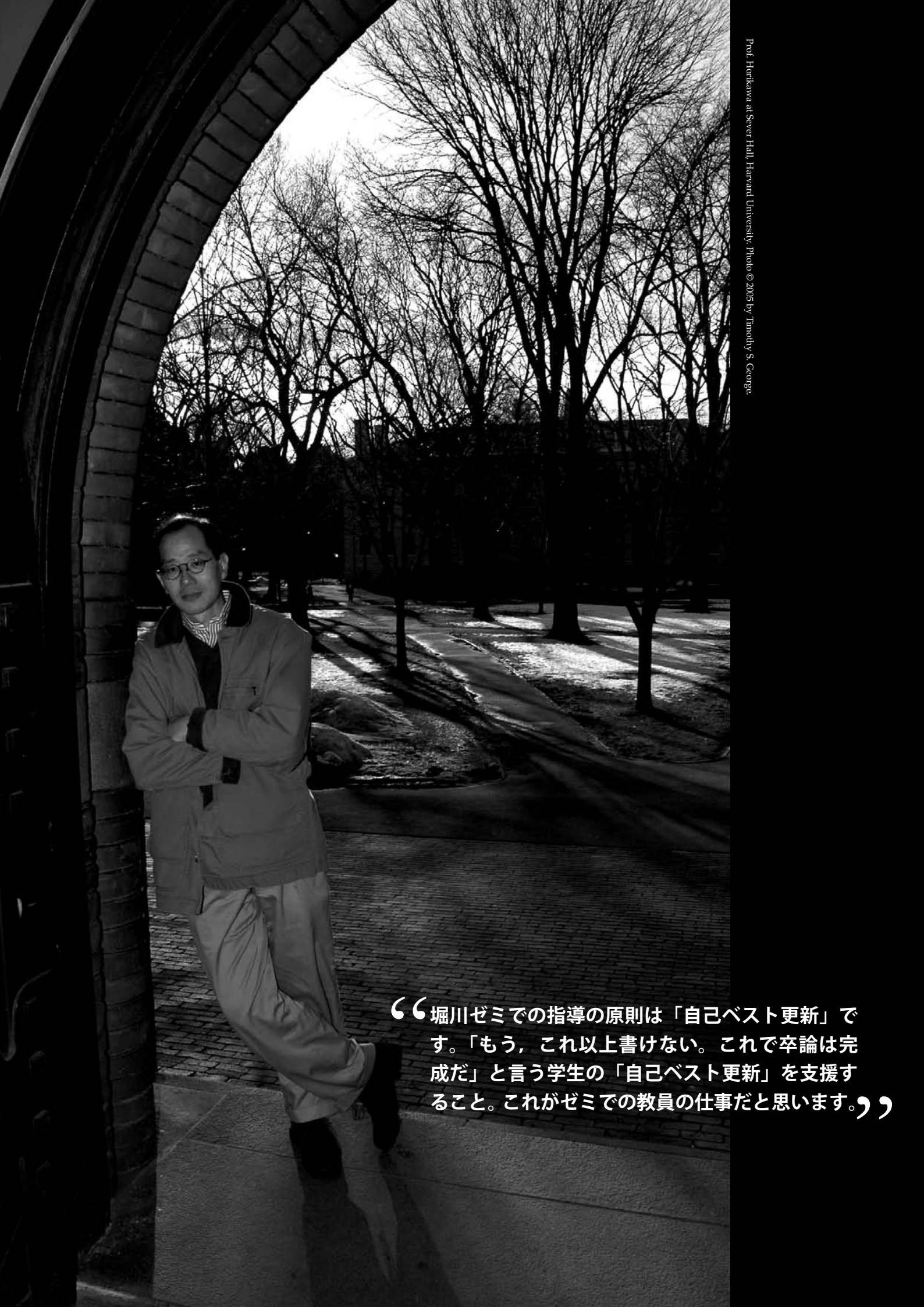
堀川ゼミとは、一体何をやる場所で、何を狙っているのでしょうか。ここでは簡潔に説明しましょう。

“Say it with data”（裏付けをもって語ろう）——堀川ゼミの精神はこの一言に見事に表現されています。それは「現場を歩き、足で考える」ということです。他人の意見の受け売りやテレビで見聞きしたことをなぞるだけでなく、自らの足と頭、眼を使って考えに考え抜き、自分の言葉を紡ぎだすことこそ、私達、堀川ゼミの目指すものです。

そのために、私達は何を学ぶのでしょうか。端的に言えばそれは「方法」です。試験範囲の英文を暗記しただけの人は、範囲外の英文を一人で読み解くことはできません。範囲内の「正解」を知っているだけで、読む「方法」を知らないからです。しかし、英文法と辞書の使い方を知っていれば、一人で未知の英文も（すらすらとはいかなくとも）読み解いてゆくことができます。初見の英文であっても動じることはありません。なぜなら、「方法」を知っているから。堀川ゼミでは、具体的な社会問題を研究する過程を通じて、社会を見る「方法」を学ぶことを目指します。卒業しても古びないもの、それこそが「方法」です。

ゼミ生は各自の選んだテーマで卒業論文を執筆し、高度な知識のみならず、この「方法」を身に付けてゆきます。堀川ゼミでの卒論指導の原則は「自己ベスト更新への挑戦を支援する」です。「もう、これ以上書けない。これで卒論は完成ということにしよう」と早上がりしようとする学生に「待った」をかけ、限界と思った地点を超えてもうひとがんばりさせること——そんな「自己ベスト更新」を支援することが、ゼミでの教員の仕事だと考えています。

自らの限界を自分で打ち破って、想像もできなかった広い視野がパッと開けた瞬間、きっと君は気がつくはず。あきらめずに走りきった者だけに許される「勝利の美酒」が本当にあるということ。この一文は、その美酒への招待状に他なりません。



“堀川ゼミでの指導の原則は「自己ベスト更新」です。「もう、これ以上書けない。これで卒論は完成だ」と言う学生の「自己ベスト更新」を支援すること。これがゼミでの教員の仕事だと思います。”

# 2010 年度（第 9 期生）

## 募集要領

### ■ 堀川ゼミの概要——応募前に知っておきたい事柄

通常のゼミは、おおよそ下記のように運営されます。今年度の履修者との相談で決まる部分もありますが、基本線は同じです。

**開講時間** 月曜 5 限（於ゼミ室；人数によっては堀川の研究室）です。

**ゼミの基本テーマ** 基本的には都市問題か環境問題に興味のある学生を対象とします。キーワードでいえば、「社会学, 都市問題, 環境問題, 歴史的環境, 公害, 社会調査, フィールドワーク」といったところとなるでしょう。具体例でいえば, 都市問題系では「都市社会学, 都市計画, 再開発, 景観問題, 町並み保存, まちづくり, アメニティ, 都市空間, 住宅問題」など, 環境問題系ならば「環境社会学, 公害問題, 足尾銅山鉍毒事件, 水俣病事件, 公害汚染地域の再生, 環境保護運動, リサイクル運動」などです。

**指導内容** 基本的には, 下記の 3 分野において指導がなされます:

- (1) 研究に必要な技術の学習 (パソコン, データベース, ノートテイキング等)
- (2) 基礎的な文献の読破 (精読と多読, 英語文献への挑戦)
- (3) ゼミ論文の執筆 (年度の終わりの修了論文〔ゼミ論〕と卒業論文〔卒論〕)

**演習 (ゼミ) の進め方** 課題文献を全員が熟読してきたうえで, レポーター 1 名が内容を簡潔に要約します。内容を過不足無く理解し, 重要な論点を端的に指摘します。それを受けてコメンテーター 1 名が文献の持つ可能性や限界, 問題点や疑問点, 批判点をあげて議論の口火を切ります。その後は教員も交えて縦横無尽に議論する——これが毎週の演習の進め方です (後期からはスケッチャー 1 名が当日の議論内容の概要をまとめてプリントにして翌週に配付, 議論の中身を再確認します)。通常, 16:50 に開始して, 18:40 ごろまで行います。また, 重要な雑誌論文のデータベースを分担して作成し, ゼミのホームページ

上で公開する「ゼミ・プロジェクト」も行います。

**サブゼミ** 正規の演習（本ゼミ）とは別に、ゼミ生による「サブゼミ」も、堀川ゼミの活動の重要な柱のひとつです。サブゼミは、教員抜きのゼミです。ここで議論の続きをしたり、お互いの素朴な疑問を出しあったり、あるいはゼミ文献の予習を一緒にやったり。サブゼミ運営の仕方は、学生同士で話し合って決定します。年度によっては、T.A. (Teaching Assistant) の大学院生が相談役として参加してくれる場合もあります。

**演習のモットー** 堀川演習のモットーは“Say it with data.”（「裏付けのある主張をしよう」「データで語ろう」）です。これはアメリカの著名な統計入門書の書名 *Say it with Figures*（邦訳『数字で語る』）に由来しています。データと言い換えてあるのは、インタビューなどの質的データを積極的に採用しているゼミだからです。いすれにせよ、机上の空論ではなく、地に足をつけた議論を目指している、という意味です。

**演習の年次予定** 大枠では、下記のような年間計画によって運営されます：

【Iゼミ】	前期	社会学の基礎文献の講読
	夏休	ゼミ合宿
	後期	古典講読 -1・各自のゼミ論構想発表
【IIゼミ】	前期	古典講読 -2・短い英語論文の翻訳
	夏休	ゼミ合宿
	後期	文献講読・各自のゼミ論構想発表
【IIIゼミ】	前期	各自の卒論研究・フィールドワーク
	夏休	ゼミ合宿
	後期	卒論構想にもとづく集中討議
	1月中旬	卒論提出（4年生）
	1月下旬	ゼミ修了論文提出（2-3年生）
	1月末	卒論公開審査（口頭試問）

**演習の行事** 下記のように行事はそう多くはありませんが、基本線は「メリハリのあるゼミ生活」です。「ゼミはきっちり、楽しくやるときは、思いっきり楽しく」の精神です。

- ・新歓コンパ（4月中旬から下旬にかけて）
- ・サブゼミ（週一回）
- ・夏合宿（2泊3日）
- ・卒論公開審査（卒論公開口頭試問）
- ・追い出しコンパ（公開審査の直後；皆でおしゃれをしてレストランで本式のディナーを食べて語らいます）



## 卒業生の進路

1997 年度に始まった堀川ゼミでは、現在までに 6 期のゼミ生が多摩キャンパスを巣立っていきました（7 期生が 4 年次に在籍中）。主な進路を列挙すれば以下のようになります：

- ・株式会社東急コミュニティー
- ・株式会社システックス
- ・環境コンサルタント会社
- ・全日空システム企画株式会社
- ・凸版印刷株式会社
- ・株式会社 大京管理
- ・株式会社 丸善
- ・Google
- ・航空測量会社
- ・弁護士事務所
- ・桃山学院大学社会学部専任講師（環境社会学，経済社会学担当）
- ・NEC ネクサソリューションズ
- ・法政大学大学院政策科学研究科修士課程（環境社会学専攻）
- ・東洋大学社会学部非常勤講師（環境社会学），など

## 演習の「売り」

- (1) 論文の個別指導を受けることができます。
- (2) 教員がフィールドワークを得意としているので、自分でフィールドワークをしてみたい（あるいは、フィールドワークをもとにしてルポルタージュ／新聞記事を書いてみたい）と思っている人に対して具体的なアドバイスをすることができます。
- (3) 関連する学問領域が複数にわたるため、受講者の今後の学習，とりわけ卒論に参考になる事項が学べます。
- (4) 大学生として必要な基礎技術がキチッと学習できます。
- (5) 程よい規模のゼミで，仲間のサポート・叱咤激励のなかで勉強をすすめることができ，深い人間関係が構築可能です。
- (6) サブゼミや合宿の企画・運営は，大幅に学生に任されていますので，自分たちの希望を反映させることが可能です。
- (7) 過去 4 名が大学院に進学（うち 2 名が学会賞受賞）したことが示すように，楽しい中にも高いレベルの議論が可能です。また，院入試対策への助言が得られます。
- (8) ゼミのホームページで重要な学術文献の総目録検索データベースを作成して公開していますので，そのプロジェクトに参加できます。現在公開している『環境社会学研究』（環境社会学会刊行）などの総目録は，世界中で堀川ゼミのサイトにしか存在しておらず，とても便利と好評です。
- (9) 卒論提出後，八王子の小さなフレンチ・レストランを借り切って行う卒業の宴は，卒業生が繰り返し語るほど，心に残る素敵な行事です。



**Horikawa Seminar**

Dept. of Sociology  
Hosei University



## ■ 2010 年度（第 9 期生）選考要領

**募集人数** 最大 12 名程度

**選考方法** 受講希望者は 4 月 8 日（木）13:30 に 516 教室に来室してください（時間厳守）。「レポート」（A4 判で 2～4 頁程度を、各自、あらかじめまとめてきてください）と「面接」（20～30 分）をもとに選考し、後日、結果を 2 階事務課前のゼミ掲示板に掲示します。なお、4 月 3 日には説明会もあります。

**応募者への希望** 受講条件として、下記の 7 点を学生諸君に求めたいと思います：

- (1) 正規の時間以外に週 1 回実施するサブゼミに参加すること
- (2) きちんと毎回出席し、熱意をもって課題等を実行すること
- (3) 課題以外にも自分で主体的に文献を探して読んでくること
- (4) ゼミ開講 9 年目という条件をむしろプラスの条件と考えられるパイオニア精神にあふれていること
- (5) 自分にとって揺るがせにできない疑問を考えてみたいと思っていること
- (6) 積極的に「ゼミ・プロジェクト」に参加すること
- (7) 「教員から教えてもらおう」態度ではなく、自分から積極的に学ぼうとすること

**ゼミ公式サイト** <http://www.t.hosei.ac.jp/~sab/>

## ■ 担当教員・堀川三郎のプロフィール

・“Say it with data.” をモットーに、学生のころから一人で「現場」を歩き、自分の目と足で調査することを続けてきました。1984 年早春、北海道小樽市で小樽運河の保存問題に触れて以来、現在も調査を継続中。古い町並み（歴史的環境）を残すことは「好事家の手慰み」ではなく、人間と環境との関係について、何か大切なことを語りかけているのではないか。こうした問題意識が私の研究の原点です。その小樽を基準点として、他の町並み保存の現場（近江八幡、妻籠、伊根、川越、飢肥、鞆ノ浦、Boston, Cambridge, Tampa, St. Louis, Charlottesville, Williamsburg, Charleston, Savannah, Venezia など）や公害被害地（水俣や足尾など）を歩き回るうちに、研究することの楽しさや苦しさといったものが少し見えてきたように思います。

・（「著者略歴」風）に書けば）1997 年に法政に就任、現在、法政大学社会学部教授。慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程修了、専門は環境社会学、都市社会学。「環境社会学」「社会調査」「社会調査実習」、「演習」「外書講読〔英語〕」などを担当。東京大学客員助教授、米国・ハーヴァード大学ライシャワー研究所客員研究員、同大学エリオットハウス盟員を歴任。環境社会学会理事、『環境と公害』編集同人、和光中学校遠泳コーチ。

## ■ 卒業生は語る——「堀川ゼミ」とは何であったのか

### □ ゼミでの忘れられない思い出

なにか大学生らしいことがしたいと、サークルの先輩に薦められて、堀川ゼミへ参加したことがきっかけでした。それまで、受動的に生きてきた私をはじめ自分からやりたいことを見つけ、アクションを起こし、卒業論文という形として out put を出せた思い出の場所であったと思います。自分がやりたいことを先生やゼミ生のみんなに支えられながら思う存分に進められるという経験は、社会人になっても得られるものではないと思います。また、堀川ゼミで培った“Say it with data”といった考え方や経験は社会にでてからもとても重要になると私は確信しています。(4期生・田淵由記・情報関連会社勤務)

### □ ゼミの存在

これまでは、決まりきった言葉を、ただ独立した形で頭に詰め込んでいくお勉強をしていました。大学に入ってからというかゼミに入ってから、答のないことがらをデータや理論に頼って自分なりの考えをつくっていけることが、驚きで面白くて、これが学問なのね！と、人知れず喜びでいっぱいでした。私に考えることをさせてくれる場を与えてくれるゼミ。学校にしていることができるぎりぎりの時間まで続く議論や、ゼミの方針に対する話し合い、どれもこれも時間がかかるし重い内容で苦しいはずなのに、私がお場にいないことのほうが苦しく感じていました。びっくりするくらい真剣に問題に対処して、どうかかよい方向に持って行こうととりくむゼミ生たちだから、どうしても好きになっちゃう。信頼できる仲間がいることがとてもうれしい。プライベートでもずっと親しくしていきたい大切な仲間が出来たことが、私にとってとても大切です。2年生から4年生まで週1で会っていて、へたすると恋人よりも頻繁に会っていたゼミ生とまめに会えなくなることは、本当に寂しい。でもでも、会う回数は減っても、再会すれば今までと変わらないノリで話し合える関係が続けられると思います。皆さんどうでしょう？(1期生・片山清美)

### □ 堀川ゼミで得たこと

1997年、私たちが入ゼミして最初に扱ったテキストは奥村隆さんの「社会学になにができるか」という文章だった。そこで奥村さんが言っていたことは、社会学とは、世界を見、考えるための性能のいい「道具」であり、社会学を学ぶということは、「知識」を得るよりも「考える道具」をみつけることなのだ、ということであったと思う。この3年間、私がゼミを続けて得られたもののなかで、これからの人生においても確実に役立つのは、まさしくその「考える道具」なのではないかと思う。そしてそれは、一人で本を読むだけではなく、「ごつごつ」を感じ取れる深い洞察力と人に対する温かさ(その温かさは「なめらか

さ」を維持するための表面的な温かさとは違った)を持ったゼミ生と共に勉強し、語り合ったことで、少しずつ身につけてきたものである。この3年間で、私は、ごつごつした世界に違和感や生きずらさを感じる自分を、少しは肯定できるようになった。そしてある部分においては、なめらかな世界に安住していることを自覚できるようになった。けれどもみんなもよく知っている通り、私はまだまだものすごく未熟者である。時には「なめらかさ」の背後に潜む誰かの痛みに気がつかず、無自覚に彼らに対する暴力に加わってしまっていることがある。そんな時、ゼミ生と語り合ったことを思い出し、はっと我に返る。そして、そうゆう「あたりまえ」を武器に誰かを傷つける行為を自分が望んでいない、ということを出すのだ。卒業して、私たちは以前のように頻繁に会うことは出来なくなる。しかしこれからも、刺激的でなおかつ気の置けない仲間たちと、何らかの形でつながっていたいと願っている。(1期生・木内明美)

#### □ 基盤形成の場として堀川ゼミ

ちょっと大げさな表現をすると、私にとっての堀川ゼミは「自分の基盤を形成した場」だと思う。堀川ゼミという“場”を通じて、いままで「当たり前」だと思っていたことに疑問を持つようになった。疑問について、真剣に考えるようになった。自分の頭の中にある考えを他の人に正しく伝えるには、どんな言葉を使ってどうやって話せばよいのだろうか、意識するようになった。相手が話している言葉を聞くだけでなく、その背景や前提まで含めて理解するための努力をするようになった。私は“SE”という、ゼミの内容とは一見なんの関連性も持たない職業に就いているけれど、堀川ゼミで学んだ「考えること」「人に伝えること」「人の話を聞くこと」は、私の強みとなっている。(4期生・宗像美智子・NECネクサソリューションズ勤務)

### ■ 現役生も語る——現在形としての「堀川ゼミ」

#### □ 河上裕介的・堀川ゼミへの誘い

堀川ゼミでは、4年の卒業論文へ向けて物事を深く考え、分析する力を養うことを目指しています。具体的には、社会学の文献の講読や、3年では英語論文の翻訳にも取り組みます。ゼミはいつも堀川先生の研究室でおこなっていて7人(2ゼミ生6人+堀川先生)で四角いテーブルを囲んで議論をしています。ゼミ中は部屋の空気が1.5倍くらい濃くなります。ときには先生がおいしいコーヒーを淹れてくださいます。堀川先生は研究への熱い思いと、学問に対する真摯な姿勢をもった方です。また趣味の幅が広く、特にファッションへのこだわりと、写真への愛は、その饒舌な語りを通じて(通称「堀川しゃべろう」)ゼミ生のだれもが認めるところです。ゼミは普段は3学年が別々に活動していますが、夏合宿では全員で机を囲んで、議論します。

学年をこえての議論はお互いにとっても刺激を受ける場です。ゼミ中は張詰めた雰囲気ですが、コンパのときは和やかです。私と1ゼミ生の佐々木君はボケ役にまわり、「すべる」ことがしばしばなので、ツッコミの得意な人は大活躍できると思います。ゼミに入ってから、私は少しずつですが、一個人として自分の頭で考え、判断するように変化してきたと感じています。それは議論の中で、論理的に考え、自分の意見を述べる訓練をするなかで、養われているのかもしれませんが。堀川ゼミは自分のテーマを追求したい人、物事をつきつめて考えてみたい人、学ぶ意欲をもった人を歓迎します。4月に新ゼミ生のみなさんに会えるのを楽しみにしています。(7期生・河上裕介)

#### □ 贅沢な時間

大学に入って間もない頃、高校と大学との違いを教授たちは「大学は高校のような勉強とは違い、自分の興味があるものを研究できるおもしろい場所だ」と言っていた。だが、私は1年次が終わっても大学をそのようにおもしろい場所だとは感じる事ができなかった。飲み会では「大学ってこんなもんか。案外退屈だな」と友達と語っていた。しかし真剣に学問を学びたいと思い堀川ゼミに入ってからほぼ一年がたった今、飲み会でそんな話はもうしないだろう。研究室で行われるゼミは、ひとつの議題に関してみんなで頭を悩ませて議論をする。「サブゼミ」では時間を忘れて、学部棟閉館ぎりぎりまで続く議論になる。議論、議論、そしてまた議論……。疑問点があれば他の文献を読む。文献を読めば読むほど自分の無知さが証明されていく。学問を学ぶことはゴールのみえない苦しみでもあるが、今まで経験したことのない“おもしろさ”も感じる事ができる。このゼミを通じて一年間学んできた今、自分が研究すべきことが視えてきた。来年時からはもっと大学をおもしろい場所にできるかも知れない。多くの本に囲まれ、テーブルランプの暖かい明かりが照らすなかで行われるゼミ。熱くなった議論のあとはジャズを聴き、知的好奇心を掻き立てられる先生の話で余韻を過ごす。大学でこんな贅沢な時間を過ごせる場所が他にあるのだろうか？(8期生・佐々木健太)

#### □ From 研究室 to 日常

「問うべきテーマって何だろう」。ゼミに入ってから、常日頃自分に問いかけている課題だ。ゼミでは、文献講読をし、その文献についてまとめたレジュメを持ち寄ってディスカッションをする。例えば、「電車内で化粧をしている人に不快感を感じる」理由について、公共圏と親密圏という概念を使って議論していった。文献に書かれている内容で十分か、何か新しい切り口もあるのではないか。活発な議論が出来るときもあれば、考え込んで沈黙が続くときもある。さらには、堀川三郎、もとい“堀川しゃべろう”の独演会になることも……(笑)。そんなゼミ活動を通じ、社会学を使って身の回りの世界がどう見えるのか、を

考えるようになった。他の講義の教室で、会場案内の仕事をするライブ会場で、高校の友人と話す飲み屋で、小説を読む電車内で。些細なきっかけで「これって社会問題かも」と考える。毎年12月にはゼミ修了論文の構想発表がある。自分が何を追究したいのか、発表が上手くいかないと、泣きたくもなる。でも、文献で学んだことを胸に自分の問うべきテーマを見つける過程は、今の自分の大きな糧になっていると思う。それは、ゼミでしか経験できないこと、ゼミでしか得られない力だと思う。先生の小さな研究室で濃密な議論をし、時にはコーヒーを飲みながら堀川先生のスーツ談義に耳を傾ける。自分の限界に挑む“社会学的1000本ノック”を通じて自分を見つめることができる。堀川ゼミとは、そんな空間なのではないかと思う。(7期生・前田尚希) ■



堀川ゼミ募集要項 2010: Seminar Prospectus

2010年4月1日発行

編集・発行＝堀川三郎

•

〒194-0298 東京都町田市相原町4342

法政大学社会学部 堀川研究室

•

写真およびレイアウトデザイン＝堀川三郎

Layout design by Saburo Horikawa.

Cover photo: Inside the Wren Building (constructed between 1695-1700)

at College of William & Mary in Williamsburg, Virginia, U.S.A. Copyright © February 2009 by Saburo Horikawa.

Copyright © April 2010 by Saburo Horikawa.

All rights reserved.

•